

書僧贅筆

一

1加
743
/

門 1加1
歸 743
卷 1



書僧贊筆

享保年中法用より新國史以下十一部は書籍所
吟味し書 作出されは法觸書は寫し

享保七年

一 目錄と書籍と法用と付は同所抄し者より
不差出書法料へ不は相觸は

一新國史より風土記よりハ法藏小全部より
但し風土記ハ書後出雲法藏小全より

一本朝月令より類聚國史より書付し通考教より
法藏小全よりハ大體本よりハ只考し分石抄



より、善し、極ふ可く、海に

一 在書物之作、自而兼て合り、より、林
大學又子へ可く相談に

目録

一新國史

一本朝世紀

一 寛平日記

一 延喜日記

一 律集解

一 令

一 令抄

一 弘仁式

一 貞觀式

一 法曹類林

一 為政要

一 風土記

一本朝月令

一卷三卷、六卷と

一 律

二卷、六卷と八卷、十二卷と

一 令集解

廿五卷、廿七卷と、二十七卷、廿九

一 類聚三代格

二卷、四卷と六卷、九卷、十一

一 類聚國史

六卷、八卷、十卷、十二卷、十四

亦五卷、十四卷、十八卷、廿五卷、廿七卷、
六卷、七卷、八卷、九卷、十卷、十一卷、十二卷、
十三卷、十四卷、十五卷、十六卷、十七卷、十八卷、
十九卷、二十卷、二十一卷、二十二卷、二十三卷、
二十四卷、二十五卷、二十六卷、二十七卷、二十八卷、
二十九卷、三十卷、三十一卷、三十二卷、三十三卷、
三十四卷、三十五卷、三十六卷、三十七卷、三十八卷、
三十九卷、四十卷、四十一卷、四十二卷、四十三卷、
四十四卷、四十五卷、四十六卷、四十七卷、四十八卷、
四十九卷、五十卷、五十一卷、五十二卷、五十三卷、
五十四卷、五十五卷、五十六卷、五十七卷、五十八卷、
五十九卷、六十卷、六十一卷、六十二卷、六十三卷、
六十四卷、六十五卷、六十六卷、六十七卷、六十八卷、
六十九卷、七十卷、七十一卷、七十二卷、七十三卷、
七十四卷、七十五卷、七十六卷、七十七卷、七十八卷、
七十九卷、八十卷、八十一卷、八十二卷、八十三卷、
八十四卷、八十五卷、八十六卷、八十七卷、八十八卷、
八十九卷、九十卷、九十一卷、九十二卷、九十三卷、
九十四卷、九十五卷、九十六卷、九十七卷、九十八卷、
九十九卷、一百卷、一百零一卷、一百零二卷、一百零三

以上

右に通書付出の間に取らるる、自分所持年之
に者家来又ハ法代官不領、所百姓町人ホ小
印、之、相尋右に書付之、其、差上、振可
相觸江

正月十八日

水野伯耆守

法郎四人

駒木根肥後守

寛 播磨守

大久保下野守

市代官不領、法郎四人

一 自分所持年之、其、家来又ハ領知、寺社百
姓百人ホ小印、之、相觸、之、中、以

十五日觸書、小印、之、其、付、如、以、日十八日法

郎四人、市觸書廻

一本朝月令類聚國史、之、ハ、有、花、可、以、由、相觸、以
ハ、書、遠、之、其、法、藏、之、以、以、音、下、後、集、知、在、書、付
二月七日法郎四人、市觸廻

古事記傳、云、廿一月、廿、新撰姓氏錄、錯乱之、其、今、の
卯、本、以、の、之、ろ、才、三十一、葉、と、才、三十二、葉、と、の
次、存、錯乱、一、て、市、傳、之、な、り、其、乃、才、三十一、葉、に

とて姓を標として孝昭天皇より行は
れ三十二葉の終り。小野朝臣の条より今
は小川は是なり又三十一葉の終りなり。河内長
才三十二葉の終りなり。河内朝臣大才より行
は其終りなり。は錯簡よりなり。才三十一葉
田朝臣より河内長才より八氏在京皇別なる
は等々。たの山内皇別ありをより一本書を
授けり。はたの山内皇別ありをより一本書を
錯簡よりなり。教姓を誤りてとて是なり。か
く是より一書なり。わくものなり。
以上山内皇別小
野朝臣云々細注

姓氏録今普通の即本上の巻廿一丁と二十二丁
と入習ハ則ち古本のくく寛政十一己未春
にて今より凡華人齋よりくくろの写本目錄
在り此は是四庫全書提要あり簡明目錄に載
る。而の乾隆は秘書なり。世俗は書と云板書と
なり

周易傳義六卷

易傳燈四卷

鄭教文書記一卷

法範鏡二卷

春秋釋例十五卷

春秋長歷一卷

春秋金鎖匙一卷

春秋別典十五卷

論語意原二卷

唐詩論斷三卷

金華子二卷

東京錄一卷

諸唐傳信錄三卷

三國紀年三卷

省心難言一卷

江雁異人錄二卷

建安華錄三卷

清溪錄一卷

孟子外書一卷

蘇氏演義一卷

江南餘載二卷

三國雜事二卷

農書三卷

改古編十卷

燕魏雜記一卷

偽齊錄二卷

月繁錄一卷

解祿華錄一卷

家訓華錄一卷

田園滄海四卷

話席放談二卷

唐漢詩話二卷

選詩句圖一卷

常談一卷

吳興國寶四卷

洞天清溪集一卷

顧願經一卷

史載之方二卷

淳熙薦士錄一卷

張氏可書一卷

誠外詩話一卷

藏海詩話一卷

古人別号一卷

自號錄一卷

希姓畧一卷

長物話一卷

急收仙方六卷

產育寶度三卷

臨竹堂經牘方五卷

匡藏書目一卷

篇史一卷

解帖平六卷

輿地碑目四卷

玉刊類編八卷

未齋金石考刻考略三卷

群書小集百十二卷

歲時音旨起廢集發墨寸三卷

古者六書私臆錄所自是下書未至

陸平紀事二卷

人海錄二卷

客舍偶聞一卷

東皋雜賦二卷

隸韻二卷

下声一
去声一

古文韻海五卷

建元考一卷

潤著堂畫記一卷

卧菴藏目一卷

墨像彙觀四卷

享金錄一卷

觀石錄一卷

恆石錄一卷

冒董志十二卷

月波洞中記一卷

古刻叢書一卷

大六壬銀河棹一卷

兼濟堂歷算書刊修一卷

萊竹堂碑目一卷

天一閣碑目一卷

金陵古金石考目一卷

古今石刻碑帖二卷

法帖神品目一卷

金石林一卷

金石林時地考一卷

金石表一卷

古今碑刻一卷

金石後錄六卷

金石後錄四卷

湛園題跋一卷

鏡官圖經八卷

穆參軍集四卷

廣湖集九卷

洪亮又集二卷

西渡詩集一卷

山林集拾遺四卷

金石錄補廿七卷

辨帖第二卷

禊帖餘聞一卷

金石品二卷

古玉文古記二卷

東觀集十卷

文雅子待一卷

老圃集二卷

石學士集一卷

附錄
目錄八卷

玉香英元集六卷

冷齋詩集八卷

奕藻遺稿三卷

四隱集四卷

傳興礪詩集四卷

稽古詩集一卷

中興群公吟藁八集一卷

湖溪集廿四卷

宋送錄十五卷

以上

蘇太存文編四卷

蒙隱集二卷

紫氏四隱集一卷

山氏集一卷

畏斗詩集一卷

前賢小集拾遺五卷

古硯齋記詩集

黠齋詩集廿八卷

源氏物語対話云 太平出羽守重政の家来小栗舟
勘介とて行成流能書亦礼節小印者とて信る者
と落やう小栗一羽枝とてたうか金を收平も
昔の……群書一覽云とこの名門本亦家物
法ハ新村尚房の一枝形 隆平よりあをりて記
さうが是ハ尚房雅嘉共ニ語りて則干々視ると
ころは本以按じハ大ハ異なりなり雅嘉の……
……尚房ハ隆平ノ載と新の一の石合致ハ
証ハ具さ小栗の如し

源右梅の花は盛なりと一枝形ハ藤ふさ……

歌の中へちと入……獨つ……
梅ハ凡ハ姉うとてさつと散るれハ歌も味方
とらととて感……あハ梅の因……
位中乃後の花は……梅をさ……
……中……源右馬……
……源右馬……
……源右馬……
……源右馬……

予々視……長門本平家物語十六卷一の石
合致の証云……

梅原源をうう時いさうとさうけわろけか
けひし時いさうとさうわろとぬきて夜
入替し物ひき。我輩のさうさうさう
中ふやさうさうい片おちなる梅のまゝ、盛
なりと一枝とりてあひひきさうつて歌の
中へうけ入て物うさうさう時さ梅り内や
うとてさう歌うられい歌も味方さうさうと
てかんじさう。而梅原さうさうい三十さう
なるわろこの福衣さうさうあひひきさう
曾きてさういひひきさうさうさうて進

出中り。いふ三位中梅原は使さうは梅り枝
さうさうひていさう中さういさうさうさう
さうのうけさうさう梅りさうさうさう源を馬
さう花さうさうさうは通さうさういんして生
さうさうさうたさうさういさうさうたりさう
云々

又云春首ふ徳月ありてその月録の末ふかくさう
さう

太ハ信濃あ自行長他 安置尾州 安徳天皇
さうさうさうけ本二十春さうて雅原さうさうさう

十二卷或十六卷

楊憲自撰楊經云也小長川本平家物語長門寺間
關河治世多什物子平家物語少々々々
由水々楊々人長門縣府家士古武多能合々々々
て寫一々々々諸々々元中も冊子々々前住若二
今々々々々々々

書紀集解云書紀書本亡慮教家有慶長刻本者卷
末有慶長己亥清原朝臣國賢跋又有慶長十五年
活泐野子三百跋按跋平經校離人安貞二年有兼
賴正直中有卜部兼方永仁中有卜部仲季嘉元甲

辰有内大臣實隆云乃以内相公本錄梓云今世所
盛行即以此本定為阿脚僧雲峰者本雲博者勢州
相官龍照近門人也寬延元年倡齋一幅圖一卷書
日世是小戸橋穩原圖世是古本書紀摘要實道曾
遊于和州謁石上神宮宿于農又家又年七十余出
一麓几十四軸曰家所旧離傳為經文不知何經今
施和尚以新寫福受而披之題曰書紀心竊怪之急
取印本參校間有錯簡紙修故摘安記之以為一冊
聞君古史故未示之留之而宿遂得騰寫嘆曰惜不
觀全本答曰瑩紙硬黃字畫精好實道深愛賞之化

枕藏十卷中第一卷第十二卷第十三卷第十四卷
第十八卷自第二十卷至第二十五卷並國檢每卷無
藏頭不知何人所寫想當平城朝本蓋第三十卷末
有干支姓名惜殘失不備干以此本卷後言疑始解
大有得所引以稱古本是也有熱田神庫所藏本明
和七年乾庫中所校永和三年丁巳十一月四日四
條金蓮寺四代上人因權吉司奈主尾張伴宗所清
耳藏熱田大神宮内院世凡十五卷分神代上紀為
二軸才十一卷及才十六卷以下綱引以稱熱田本
是也有活字慶長中所刻大振興原本不異有一二

可取引以稱活本有清原本清原國賢卿所自寫自
神代上紀至武烈天皇紀引以稱清本有大中長種
忠新寺手寫自德體天皇紀至持統天皇紀引以稱中
臣本是也有壹井本壹井義知所校定引以稱壹本
予所閱諸本如左

秀根が云所の重牒の記しを考へて後日本紀
云ありてしるべきなり

諸共再云候日本紀所載上日本紀所載とありて
由之觀て重牒の齋しるべきなり本ハ書紀と片
ありハ疑ハ

伊勢國宮崎文庫（伊勢國宮崎）神山の麓に 慶安元年小宮建
成は是ハ外宮祠官等の學校として講習討論の
寮也はうや祭記の人々教七十家あり是と文庫
底より古今奉納の書目くくく 掲下小掲て
凡四年部（春秋）大信と一終林乃春寄り且一と
て開く神宮の古書收めしは以て書小くか
る末次片小文章并け能漢書舊約を以て安
けらるハ和書ハ一か 禁裡秘家宮方の秘本よ
してるハ亦寄りて漢書ハ唐書ハ和書ハそ
くあり右の作意他國來物くくく 其書
小くして講師より立文庫人数小ありされとも志
しあつてれば講師にも聴流にもなりて日廻林

崎文庫ハ（新）岳尾崎大貞享四年小送立りて
云く其金と若干なりといふ一何の學校合して建
成なりと云ハ林崎より南のうく丸山といふと
こ所小ありて文禄三年小この地よりつて明
成この文庫よりなりと云ハ在文尚書古注正和在
鈔ありてりて藤貞幹好古日記小古本のいへ
る部小記して其宮崎文庫旧蔵と記してなりと
いふとくくく其の諸共書目古鈔本部小ありと
なりとくくく其の西文庫の蔵印も具小古和書
古傳小模写をも因てりり其利樂校なりと云

紀をあらわしむる人々や古書もあやふらび
付けらるるあやふき事のみをさうして後人の神
代の変を説く印のきひきだすことこそ俗語
よ似し。変多き事なり。

日書云日本紀ハ舍人親王を朝臣安磨紀清人ニ
人うて編集せしむ世の人舍人親王といふと
とも安磨といふ人といふニ三人なりてハ志
そ清人といふ人きふなり。わづ変もさく
書不事ハ古今多し。

日書云内謀経上下巻注ハ何晏ハ集解首書明経

后の人々論語と内謀経といふ変もさく
うけ出さる人のあやふき事なり。

日書云ハ暖帳天皇の故万葉集の本ハ倭撰なり
この帝代時よりかまひ出来しこといひ侍
あといふこと人々自由なりけり水の出来
る高麗ハ自由小書なり。いふ人やこの帝博學
廣少玉音餘音評しして海内よりつ返所自王
の倭國集ハ所傳守の倭雲集仲雄王の文章秀森
等といふべし。あやふき事なり。暖帳天皇の
故万葉集書しとさうあやふき事なり。故万葉集ハ論

